

《翻訳》

喜劇 六人僧

—F. A. ユンカー・フォン・ランゲッグによる狂言『六人僧』独訳—

F. A. ユンカー・フォン・ランゲッグ 独訳

渡 辺 徳 夫 和訳

人物

三人の町人、彼らは京都の同じ長屋に住むお隣同士。その妻たち。

場所

町人Bの家のある京都¹⁾の通りと大坂へ向かう路上。この二つの場面が交互に変わると想定される。

(京都の通り)

町人A：(橋掛かりから来て、隣人Bの家に近づく) わたしは京都の町人で、この通りに住んでいます。これから大坂の天王寺²⁾へ巡礼の旅に出るのですが、先だって、両隣の二人も同道すると約束したので、一人旅ではありません。さて、これからご両人を誘い合わせて出かけることにしましょう。(町人Bの家の前で) 隣の者です。こんにちは、お隣さん、おりますか³⁾。

町人B：(中から) どなたで。

町人A：わたしで。

町人B：(出てきて) やあ、お隣さんじゃないですか。(この国特有の流儀で、二人は跪いて両腕の前に伸ばし、平手で身を支えたまま、地面に向かって頭を下げ、この姿勢で、しばらく丁寧なあいさつを互いにかわす) お早うございます⁴⁾。ごきげんいかがですか。

町人A：(同じ質問を繰り返す、その後何度もお辞儀をして、立ち上がる)

町人B：さて、今日はどうしたのです。何の御用で。

町人A：いや、この間、巡礼にお供するとおっしゃっていたでしょう。実は、今日は出かけるにはいい日だと思ひまして、それでお迎えに来たというわけです。

町人B：ああ、よくおいでなされた。まさしく巡礼日和だね。あと一人は

ちょうど隣に住んでいるから、迎えに行く手間が省けて好都合だ。すぐに出発できる。

町人A：では、参りましょう。

町人B：さあ、さあ。

町人A：行こう、行こう。

町人B：早速出かけよう。(道の上、すなわち、橋掛かりの上で、町人Cが、A、Bに加わる)

町人A：われら三人は、よい道ずれだ。そこで一つ決めごとをしよう。お互いに忍耐と寛容の心をもって、どんなことがあっても、何をされても腹を立てない、そのような取り決めをしようじゃないか。

町人B：同感だね。これから長い道のりだし、たまには悪ふざけをすることもあるだろう。でも、そんなことにいちいち恨みに思っではいけないな。わかった、何が起ころうとも、われらは仲良く仲間として旅を続けて行こうじゃないか。(三人とも舞台の上を回って、あるお堂に近づく)

町人A：ああ、くたびれた。ああ、ちょうどいい、その道端にお堂があるぞ。こっちに来て、腰を下ろし、一休みしよう。ああ、くたくたでもう動けない、ちょっとここで一眠りだ。(眠り込む)

町人B：本当に疲れ切っているようだな。

町人C：今日は旅の初日だから、無理もあるまい。まだ歩きなれてないことだし。

町人B：(Cを舞台のわきへ連れていく) ちょっと、ちょっと、こっちへ。やつこさん、どうやら熟睡しているようだね。そういえば、あの男、さっき道中何が起こっても、腹を立ててはならぬと言っていたな。それなら、一ついたずらをしかけて、やつを試してみようじゃないか。

町人C：あの男自ら、何事にも腹を立てないという誓いを立てたわけだから、彼がいたずらされて怒っても、別に気にすることなどないが、でも、あの男をどうしようというのだ。

町人B：あれほどよく寝ているから、気づかれずにこっちのやりたいことができるじゃないか。そうだな、いっそのこと鬚を剃って坊主にしてしまうっていうのはどうだろう。

町人C：いや、いや、それは、いくらなんでも、悪ふざけが過ぎるのではないか。

町人B：そうかな、おれはそうは思わんね。当の本人が、何があっても腹を立てないと誓いを立てたのだから、別に髪を下ろしても構わないだろう。それで、万が一やつが実際に腹を立てたのなら、その時にどうすればいいかを考えればよいのだ。剃刀を持っているか。

町人C：いや、持ってきておらぬ。

町人B：不用意だな。普段からおれは自分で髭を剃ることにしているの、ほら、剃刀を持ってきているよ。おれが剃刀を研いでいるから、その間やつの髪の毛を柔らかくしといてくれ⁵⁾。

町人C：心得た。(Aの頭を揉み、Bの方は剃刀を手のひらの上でなでる)

町人B：(Aの頭を剃っていく) さあ、これでどうやら片側は剃れた。でも、もう片側を剃るにはどうしたらいいかな。そういえば、寝ている人の耳の中に水をたらせば、寝返りを打って、もう片側を向けると聞いたことがある。(剃刀の柄を使ってAの耳の中へしずくを垂らすと、Aはくりともう片側の方に頭の向きを変える。Bはもう片側も剃って坊主頭にしてから、Aの頭に頭巾をかぶせて、上着を脱がせ、白装束の状態にする) これでよし。では、われらもひと眠りしよう。

町人C：そうだな。そうするか。

(BとCは、横になって眠る。Aは、目を覚まし、すっかり頭が剃られ、衣が変わっているのに気づいて驚き、BとCを揺り動かすと、二人はすぐに起きる)

町人B：おやっ、何だい、その恰好は。どうしてまた坊主になどなる気になったのだ。

町人A：(怒って)「何だい」だと、「どうして」だと。よくもぬけぬけとそんなことを。こんな馬鹿げた悪ふざけをするのは、そなたたち以外には考えられないじゃないか。

町人C：寝ぼけたことを言うな。出家するつもりでいるなら、出家すると打ち明けてくれればよいではないか。(Aは怒り心頭して、二人を非難する)

町人B：仮にもし、そなたの頭を剃ったのが、われわれだとしてもだ、それに不平を言うのはおかしいね。だってそうじゃないか。出しなに、何が起きても腹を立てないようにしようと決め事を言い出したのは、そなた自身なんだからね。

町人A：それゃ、確かにそう言ったよ、言ったけれども、物事には限度というものがあるだろう。坊主頭になって嬉しいって思うやつなどいるもの

か。(怒りのしぐさで、退場する。すなわち、舞台の背後の太鼓座の横に腰を下ろす)

町人 B と C: やれやれ、あの御仁は、どうも手に負えぬところがある。さあ、巡礼の旅を続けることにするか。先へ急ぐとしよう。(歩く。すなわち、能舞台の屋根を支える四本の柱の一本の柱の後ろへ立つ)

町人 A: (立ち上がって、舞台の前面に出てくる) それにしても、これはあまりにも酷過ぎるではないか。あの二人に仕返した。今に見ていろ。よし、妙案を思いついた。すぐに京へ戻ろう。

町人 A: (京都の通り、町人 B の家の前) こんにちは、奥さん、ご在宅ですか。もしかして、お隣の奥さんもおりますか。おいでなら、お二人ともちよつと表に出てきてくれませんか。

町人 B と C の妻: あら、何としたことでしょう。あれはお隣さんの声だわ。(上述のように、お互いにあいさつを交わす)

町人 A: ああ、ああ、こんな出家姿でお二人にお目にかかることになろうとは。何と痛ましいことでしょう。

町人 B の妻: まあ、いったいどうしたっていうの、その恰好。それで、一緒じゃないの。うちの人。

町人 A: ああ、面目ござらぬ、あなたたちに何もかもお話をしようと思ひまして、わたし一人、立ち戻りました。——涙があふれて言葉が出ません。あまりにも悲しすぎます。

町人 B の妻: え、何なの、胸の鼓動が、不安が増すばかりだわ。ねえ、話を聞かせて。早く。これ以上苦しめないで、お願いですから。

町人 A: そうですか。どうしてもというのなら、隠しても仕方ありません。事の次第をお話ししましょう。われらは、道中、三人仲睦まじく歩いておりました。あの不幸な出来事がどこで起きたか、その場所を言ったところで、おそらくあのあたりをご存じないでしょう、見当さえつきません。一緒に仲良く歩いていると、一本の川が流れているところに出てきたのです。あなた方の亭主は「どうだ、渡ってみるか」と言ったので、「いや、危険だからやめよう。雨が降った後だから、水嵩が増しているはずだ」とわたしは申しました。先週はひっきりなしに雨が降っていましたでしょう。あの時、この先二週間ぐらい降り続けるんじゃないかなと言ったけど、でも、あなたの亭主が言うには、いや、悪い天気はそう長くは続かないと。

実際、その通りになって、こんなにすっかり晴れ上がり、旅行日和となった。暑さも和らぎ、土埃も立たない、これほど気持ちよく、楽しい旅は、生まれてこの方初めてで、まさかこんな素晴らしい日に恵まれるとは、思いもしなかったのですけどね。話を戻すと、「川を渡ろう」というご亭主たちの言葉に対し、わたしは「見るところ、先週雨が降っただけに、今は、川の水がかなり深くて、流れもずいぶん急で危ないから、渡し船を見つけるのがいい」と申しました。でも、だめだった、二人は、わたしの言うことに耳を貸さず、川を渡ろうとしたので、「やめろ」と強く言ったものだから、口喧嘩になりそうになった。ああ、親友同士が交わした最後の言葉が、言い争いみたいなことになってしまって、それを思うとね、つかみ合いの大喧嘩にならなかったのが、せめてもの慰めだ。結局、あの二人は川を渡ろうとして、わたしは渡らず、その場にとどまり、その行方を見ていた。説き伏せようとしても、言い出したら、聞かないのがあなた方のご亭主だ。本当に二人ともそろいもそろって石頭なのは、よく知っているでしょう。頑固一徹があいつらの欠点で、よりもよってあの時、その悪い面が出てしまった。二人は、馬鹿にしたような笑いを浮かべ、わたしを「この小心者め」とからかって、水の中へ入っていった。あっ、その前に、二人は足袋を脱ぎ捨て、ぱっと素早く衣の裾をたくし上げ、さっと水に入る体勢をとって、それから、二人は、手に手を取り、川の中へ入っていったのです。その様子を目で追い、「はたしてどうやって二人は向こう岸に行きつくのか、すぐにあきらめ、わたしの言う通り、きっと渡し船を探すはめになるんじゃないか、小心者なんて言わなきゃよかったとすぐに後悔するだろう、利口者は一体どっちなんだい、おれの方じゃないか」と思った。そうして、二人の後を目で追っているうちに、思わず息をのんだ。結局二人は、手に手を取って川の中を突き進み、真ん中近くにまで行ったところで、——ああ、わたしは、自分の眼を信じるができなかった。あまりにも恐ろしすぎて。あの時、わたしの忠告に従ってくれさえすれば、あんなことには、でもまさか、本当にあんなことになってしまうとはね。あの二人が川の真ん中あたりに行ったかと思ったら、「ざぶん」と音がして、急に姿が消えてしまった。それでもいつまでもいつまでもそこを見つめ、ずっと信じていたんです、きっとまた浮かび上がってくるに違いないって。——あいつらは足を取られて深みに流されたんだ。渡し守が後になって、まさにあそ

こに危険なくほみがあるんだって言っていた。それでそこにそのうち警告のために竿を一本立てようと思っていた矢先の出来事だったんだと。そこで水の事故がちよくちよく起こるということだね。いつまでもいつまでも見つめていると、何と、かなり川下へ流され、あの二人はばかりと浮かび上がってきて、——まるでいかだのように——漂い、そして、息絶えていたんです。どうか許しておくれ。悲しみに喉が締め付けられ、もうこれ以上は言葉が出てこない。

二人の妻：(両者とも A の話を止めようとしたができず、泣きながら、そして絶望のあまり揉み手をしながら) ああ、ああ、うちの人はなんと哀れなのでしょう。

町人 B の妻：ああ、溺れ死んだとは、何と痛ましいこと。かわいそうな人。

町人 C の妻：それは、本当の話なの、そんなこと、どうしても受け入れられない。(二人とも前掛けで顔を覆い、大声で泣く)

町人 A：そこで、二人のわが友の恐ろしい死に思うところがあって、決心したのです。このはかない世の中を断念し、このように僧侶となって高野⁶⁾に登ろうと。わたしはそこへ向かう途上だったのですが、あなた方がこの不幸な出来事を何も知らないと思い、それで悲しい知らせを伝えに、ここに立ち寄ったのです。

町人 B の妻：ああ、それで、あなたの出家姿のわけが、いまようやくわかりました。やっぱり本当だったのね。この間悪い夢を見たものだから、確かに不吉な予感はなくはなかったわ。このうえは、もうこの世に生きる望みはありません、川にでも身を投げ、夫の跡を追い、自害して死にましよう。

町人 C の妻：わたしも不幸な夫より生きながらえることなんてとうてい考えられない。うちの人の跡を追って、暗い小道の上を⁷⁾歩いていきます。(二人とも泣く、嘆く)

町人 A：亭主の跡を弔うのはわかるが、でも、何も死ぬことはないでしょう。寺の中にこもって、一生涯亡き夫の冥福を祈ったらどうなのですか。

町人 B の妻：えっ、お寺の中に。ああ、そうね、それが一番いいかもしれないわ、そうしましょう。わたしはこの世を捨て、あの世にいるうちの人の後世⁸⁾を弔うことにします。

町人 C の妻：わたしもお寺に入るわ。あの人の魂のためにこの人生を捧げましょう。

町人 A：ええ、ぜひそのようになさいます。そうしてご主人の思い出をたてるのが最もよいでしょう。

町人 B の妻：ただ、わたしたちには頼る人などほかにおりません。それで、あなたに一つお願いがあるのです。どうかわたしたちの髪を下ろしてください。

町人 A：その決意が本当に固く、揺るがないのであれば、喜んでお二人のために一肌も二肌も脱ぎましょう。

町人 B, C の妻（一緒に）：では、わたしから剃ってくださいませ。いや、どうかわたしを先に。

（A は、二人の頭を剃り、二人に頭巾を被せる）

町人 A：先ほども申した通り、これからわたしは高野に参るので、ついでにあなた方の髪を携え、そこのお寺に供物として納めましょう。

町人 B, C の妻：何とありがたいこと。どんなに感謝しても感謝しきれません。

町人 A：いや、それにしても、お二人とも尼僧姿が愛らしく、板についていますね。では、ごきげんよう、お達者で。さらば、さらば。（妻たちは、奥へ引き下がる。A は舞台上を横切って移動し、再び大坂へ向かうものと想定されたし）

町人 A：はっはっはっ、愉快、愉快、うまくいった、奴らの女房を二人とも剃ってやったぞ。だが、復讐は道半ばだ。まだまだ腹の虫が収まらぬ。わが友はまだそう遠くへは行ってはいまい。さあ追いつくぞ。

町人 B と C（大坂へ向かう道の上で）：あいつはあんなことがあったにもかかわらずやはり、京には戻らなかったのかもしれないな。

町人 A（二人に追いつく、そして驚いたふうを装う）：おや、旦那がた、あなたたちはどなたです。

町人 B と C：おれたちをどなただと、いったいどういうつもりだ。その物の言いぐさは。お互いに旧知の間柄ではないか。

町人 A：そなたたちの声を聞けば、もちろん、お隣のわが友だとわかるけれども、どうにも信じられんのだ。不思議なことがあるものだな。

町人 B：何をふざけたことを。

町人 A：いや、ふざけてはいない。こっちは大まじめだ。本当に信じられん、奇跡としか言うしかあるまい。誰が言って、噂がどう広まっていった

かは、わからぬが、昔から「不幸な知らせは翼をもつ」という言い伝えがあるだろう。長屋に戻ってみると、何と、そなたたちの奥方が、そなたたち二人が川に落ち、溺死したんだと言って、悲しみに声をあげ泣いているではないか。

町人 B：おい、おい、おれたちが溺れ死にしたなんて、馬鹿な冗談はよしてくれ。おおかたおれたちに八つ当たりをしようというのだろうが、そうは間屋がおろさんぞ。(BとCはAを嘲笑する)

町人 A：いや、笑いごとではない、とても悲しむべきことがあるのだ。京に戻れば、いずれわかるが、この世でもあの世でも亭主とどうしても別れたくないときっぱり言って、奥方二人とも自害して亡くなったのだ。

町人 B：そなたの冗談は、許されるものではないぞ。そのような趣味の悪い冗談で人を騙せるとでも思っているのか。

町人 A：いや、それが作り話であってほしい。でも、残念だが、全部本当の話だ。そなたたちを納得させる証拠がある。それをお渡ししよう。

町人 B：なんだ、そんなものがあるのか。なら早く見せてくれ。

町人 A：ほら、これだ。これはね、あなたの奥さんの髪、こちらはあなたの奥さんのものだ。見覚えはないか。(髪をCに手渡し、それを驚いて見つめるC)

町人 B：これは、驚いたな。本当に妻の髪だ。——赤毛^{B)}で、短い、間違いない。

町人 C：これは、あいつの髪の毛だ。黒くて、縮れている。どう見ても本物だ。

町人 A：わたしが嘘を言うなどと彼女たちは思うまい。そなたたちがいまだ奥方たちの不幸な出来事について何も知らないと思い、それで悲しい知らせを伝えに、その形見のものを携え、急いでここまで追いかけてきたのだ。

町人 B：ああ、確かにそうだ。死んだのは、間違いないかもしれん。いくつか思い当たるふしがある。妻たちは二人とも、おれたちの身に何か起これば、自分たちは生きていけまいと常々言っていた。ああ、自害して果てるとは、何と痛ましいことか。(BとCは激しく嘆き悲しむ)

町人 A：では、この出来事があなた方の心に訴えかけるのであれば、いっそのことあの世にいる妻たちの跡を弔うのがよいのではないか。

町人 B：そうだな、それは、もっともなことだ。こうなったからには、出家して、そして高野に参るしかなかるう。

町人 C：わたしも高野へ登って隠遁しよう。それで、そなたに一つお願い

がある。どうかわれらの髪を下ろしてはくれぬか。

町人 A：心得た。(BとCの頭の髪を剃って、頭巾を被せ、上着を脱がし、僧衣の流儀に従って下着を揃える)

町人 A：それにしても、二人とも出家姿が、板についていますね。さて、早速高野に参りたいのだが、その前にもう一度京に戻ろうと思う。寺に入る前に、家の中を整理しておきたいのだ。

町人 B：そうだな、そうすることにしよう。

(三人ともみな、舞台の上を回って、京都のBの家の前の通りに着く)

町人 A：さあ着いた。(叫ぶ) お隣りの奥さん方、ちょっと表に出てきてくれませんか。(BとCの妻が出てくる)

町人 A：(笑って) はっはっはっ、そなたたち四人ともみんな、わたしにつるつるに剃られたことになるわけだ。こうなってみると、わたしの頭を剃って、さぞかしよかったと思っているでしょう、どうです、旦那方。(BとCは怒り心頭して)

町人 B：何だ、生きていないじゃないか、妻たちが自害したなどと、よくも俺たちをかついだな。しかも、坊主にしやがって、ただでは済まさんぞ。そなたの女房を連れ来るんだ。今すぐここに。髪を下ろしてやる。

町人 A：それだけではどうかご勘弁、お願いだから、剃らんでやってくれ。

町人 B と C、そしてその妻たち(四人で同時に)：いや、ならぬ、ならぬ、是が非でも頭をまるめてもらうからな。(退場。Aの妻を呼びに行く)

町人 A：(後を追う)

(僧の姿のABC三人と尼僧姿のBCの妻二人が戻って来る。Aの妻も尼僧姿となり、六人が一緒に現れる)

町人 A：まあこれで、昔から「呪いは、呪う人の頭上に返る」という言い伝えがあるけれども、まさにこのことだとわかったよ。しかし、この度のわれらの思いがけない出来事は、そうめったに起こるようなことではあるまい。それゆえ、これも、われらの一念をこの世から来世へ向けよとの仏の導きではなからうか。

町人 B：本当にそうだな。この限りのある、短い人生、無為に過ごすべきではなからう。それゆえ、この出来事が、救いへの、極楽への巡礼の旅の第一歩となるように、願おうではないか。

町人 A:それなら、このわたしに導師役を務めさせてくださらぬか、そして、そなたたちの祈りを導かせてくださらぬか。(唱え始める) なみだぶつ⁹⁾!

三人の夫たち: なーみーだー!

六人全員: なー————み————だ————……(念仏を唱えながら、一列縦隊で何度も舞台の上を回り、そして橋掛かりを通過して退場)

ロンドンにて

F. A. ユンカー・フォン・ランゲツグ

原註

- 1) 中世の時代からすでに、町や村は首長の支配下にあり、五本の通りごとに一人の監督者がおり、その者が、首長に仕えていた。さらにその監督者の下に、五軒ごとに一人の頭が置かれていた。これが五人組で、五人の男からなる組合である。その頭は町人たちによって選ばれ、自分の地区の秩序、治安、清掃を監視することになっている(ユンカー・フォン・ランゲツグ著『瑞穂草』第二巻 246 頁を参照)。京都は 1868 年まで帝の居所で、現在、第二の都。現在の天皇の居所で、第一の都は、東京(江戸)。
- 2) 天王寺: いわゆる「天の王様の寺」は、大阪の南東に位置し、広大な面積を有する、有名な仏教のお寺で、敬虔な王子、「徳のある聖なる大臣」こと、聖徳太子(572 - 621)によって建立された。
- 3) Sie という呼びかけは、ちょうど、同じ身分の間で使われる日本語の敬語にあたる。目上の者と下の者に言う呼びかけは、正確には言い表せない。Euer Gnaden や du という我々の呼びかけは、ドイツ語に移すうえでの間に合わせの言い方に過ぎない。
- 4) 「お早うございます」は午前中に繰り返される挨拶の定番で、親密な友人、親戚の間でさえも、この形式的な儀式は行われる。
- 5) 日本の床屋は、しゃぼんを使わず、髪と髭を水で湿らせ、柔らかくなるまで手でこする。
- 6) 高野: 大阪から南西 80 キロのところのところに位置する、紀伊の国の、標高 500 メートルの高野山にある有名な日本の巡礼地の一つ。もっぱら、寺、僧院、巡礼者の宿坊から成り立っていて、長い間避難所になっていた。そこは弘法

大師、「掟（すなわち、仏教の教義）の偉大なる師」（774 - 835）によって開かれ、彼はまたこの地に埋葬されている。その寺院は、厳しい仏教の宗派、真言宗、「真の言葉の宗派」に属している。有名なのは、この地にちなんで日本人によって「高野槇」と名付けられた、見事な常緑針葉樹のコウヤマキである。

- 7) 暗い小道の上：「来世」「あの世」の婉曲表現。
- 8) 赤毛に関して言うと、日本人は、本当に赤色であれ、金髪や茶髪であれ、真っ黒でない髪のことをすべて赤毛と言う。それゆえ、彼らは西欧人のことを「赤毛の外人」と呼ぶ。この二人の妻たちの髪を、赤毛や縮れ毛と言いついて表しているのは、注目に値する。日本人の髪はつややかで、もっぱら黒髪もしくは白髪である。とはいえ、白髪の人は、元通り黒く染める。実際私が思い出してみても、上述のような赤い髪の毛の存在を読んだことはないし、聞いたこともない。私自身、いまだかつて一度もそのような赤毛や縮れ毛を見たことはない。
- 9) Namida Butsuは「救ってください、永遠なる仏様！」のことであるが、特別な祈祷の文句のある日蓮宗を除き、あらゆる宗派の仏經の冒頭の言葉である。それはまた、敬虔な信者がこの世で発することが許される最期の言葉、死に対する祈りでもある。その言葉を絶えず、繰り返し口にすることで、来世における魂の救いが確実なものになる。

Namidaは、NamuとAmidaの縮合したかたちであって、Namuは、仏陀（仏）の前に置かれた、パーリ語であり、Amidaは、仏陀の別名である。このNamida Butsuはまた、「無限の光明のなかで健やかでありますように、仏様！」という言葉にも解釈される。

テキスト

F. A. Junker v. Langegg: Alte japanischen Dramen.in: Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes.53 Jahrgang, Nr.15. S.230-232 および Nr.16 Leipzig 1884, S.250-251 URL:<https://books.google.co.jp/books?id=1HwDAAAAYAAJ>（参照日：2018年12月1日）

本稿は1884年4月にDas Magazin für die Literatur des In- und Auslandes.53

Jahrgang. Nr.15-16 に掲載された Alte japanische Dramen の中の Drei Tonsuren (Roku-nin-sō). を翻訳したものである。

「狂言事典」に従えば、この「六人僧」(作者不詳)がドイツ語に訳された最初の狂言の曲ということになる。小林貢, 古川久編「狂言事典 資料編」東京堂出版, 1985, 70 頁参照。

訳者の F. A. Junker v. Langegg についてであるが、本名は諸説あり、ドイツ語名の他に、英語名を持っているという。また、生没年もいくつかの説がある。訳者の略歴については、次号で紹介する予定である。

Alte japanische Dramen と複数形になっているのは、同雑誌、同年出版の Nr.24 で、Tinten blecken (「墨塗^{すみぬり}」) も訳しているからである。